

# 令和5年（2023）度 第2回 大阪府立西成高等学校 学校運営協議会 記録

【日 時】 10月14日（土）10:00~12:00  
【場 所】 大阪府立西成高等学校 多目的室 A  
【出席者】 （会長）西田芳正委員（副会長）高見一夫委員 緋田隆平委員 榎井縁委員  
田中俊英委員 臣永正廣委員 堂上勝己委員 山下佳織委員 西田吉志委員

## 【内 容】

1. 開会
2. 校長挨拶
3. 委員紹介・事務局紹介
4. 議事
  - (1) 令和5年度の取組状況についての報告
  - (2) 多様な生徒を支援する本校の取組
  - (3) その他
5. 閉会

## 【事務局からの説明および各委員からの意見等】

### (1) 令和5年度の取組状況についての報告

#### ●各学年の様子（学年主任から）

##### 〈1年生〉

- ・50期生。218名が入学したが、転退学者が数名いる。理由の多くは、中学校時代から不登校だった生徒が4月当初は頑張っていたが、段々と遅刻や欠席が多くなり、夏休み明けから来られなくなったケースが多い。
- ・いい意味でも悪い意味でも一年生全体は、学校に慣れてきたが、遅刻や欠席も増えてきた。
- ・学年としては、進級が厳しくなっている生徒には、各クラス担任が声かけを行い授業に向かわせ、頑張らせている。
- ・毎月1回学年集会を設けており、全体で集まって話を聞く機会や姿勢、学ぶ姿勢を大切にしている。そのためにも、学年集会に来たいと思える話の内容を心掛けている。
- ・今後もカルチャーフェスタなどの行事があるので学年で団結していきたい。

##### 〈2年生〉

- ・今頑張るという目標を設定している。高校生活も一年が過ぎ、なかだるみの時期であるが、1年生時の学び直しも終わり、2年生では高校生の内容に入ってくるので頑張ってもらわないと、3年生になったら困るだろうと思う。
- ・遅刻欠席が思ったよりも多い。遅刻指導を実施する際に起床時間の確認を行うと、8時から8時半の人が多かった。また遅刻が多いのは自転車利用の生徒。30分に一本の電車だと意識して遅刻しないようになるのかもしれないが、自転車だとぎりぎりになってしまう様子。
- ・インターンシップは上手くいった生徒とそうでない生徒がおり、12月に希望者のみの2回目が開催される。
- ・2年生になり想定外の金銭トラブルが多く出てきている。高校生でアルバイトを始め、収入を得ることで急にお金を持ち始め、おごることや貸し借りなどをやり始めた。正しい金銭感覚を身につけることが大切。アルバイトを始める際に、マネーリテラシーを身につけさせる必要がある。目標を決めてお金を溜める生徒は少なく、指導を全体で考え

ていかなくはない。コミュニケーションウィークを通して、担任からも伝えていきたい。

### 〈3年生〉

- ・139人でスタートする。彼らは中2でコロナに巻き込まれた世代で、遅刻欠席は1年生時より多い。
- ・今年も遅刻が多い生徒は特定の生徒に絞られてきており、指導になる生徒もいる。
- ・youtuberの企画でヤンキー校を調査する動画で、本校隣の公園に来た時に、その動画の中のインタビューに答えてしまった事があった。
- ・この夏に進路や就活に向けて、真剣に取り組んだ生徒はすごく伸びた。社会に出ていく最後の仕上げということで、面接テストや応募前などで沢山指導を受けた後、自分で考え、自信を持って取り組んだ生徒は伸びた。夏に取り組めなかった生徒は、まだ進路が決まっていない生徒が多い。CCとの面談を行い、秋の2次試験に取り組んでいる生徒もいる。
- ・カルチャーフェスタでは、学年全体で一つのものを作り上げる予定。
- ・まだ、遅刻欠席が多いため、安心して全員卒業とは言えない現状であり、卒業に向けて頑張らせない。

### 校長から「金銭トラブル」についての補足

中学校時代から「おごってあげる」ことで人間関係を作ってきた生徒がいる。さらに高校生になってアルバイトをすることで収入が増え、そのことに拍車がかかり、おごってほしいとたかる生徒もいる。おごってあげると言ったのにそのときおごらなかつたら、次おごるという話になりそれが架空の借金となり、額が膨らんでいる。スクールカウンセラーの見立てでは、小学校や中学校で培っているはずのお金の取り扱いや金銭感覚が身につけていない現状がある。これが本校で起こっている「金銭トラブル」の実態である。

### ●質疑・応答

委員：事実上の金銭のやり取りはないのか。

校長：若干ある。

委員：架空の場合と実際の金銭のやり取りがある場合と分けて考え可視化できるようにしてはどうか。架空の場合は社会では通用しない案件。実際の金銭のやり取りに関しては学校の仲介機関（マネーコーディネーター）を設けて、そちらに相談するようにはどうか。

主任：金銭のやり取りから脅迫であったり暴力事象に発展したりするケースがあるので単純に金銭トラブルだけの問題でないところがある。

委員：このトラブルが急に増えたというところも気になる。

委員：発達障がいの傾向もある。お金に執着することがよくあり、金銭のやりとりが可視化されていないと、曖昧なままでは管理できない。金銭やり取りの表などを使用して可視化することが有効ではないか。

委員：京都大学大学院でマネーリテラシーの専攻している方がいる。金銭感覚は幼少期からきちんと勉強しておく必要があるとのことで西成区の小中学校で特別授業をやっていただきたいと打診して了承をもらっている。よければ本校でも実施してみてもどうか。

委員：高校生になり稼げるようになって、金銭トラブルが起こりやすく、人間関係が壊れる問題に発展しやすい。また現代電子マネーの普及で金銭感覚を狂いだしている側面もある。

校長：小中学校の授業はぜひとも見学させていただきたい。給料が入る予定のものをすでに入金されたかのように先行して使用したりする。実際の給料日には先月の支払いにあてないといけなくなる。お金の整理の意味では最初の方にあったように使えるお金とこれから入るお金と表にして可視化することが必要なのかもしれない。

委員：youtuber とは誰のことか。

主任：（当該アカウント名）。全国的に有名な youtuber である。独自に決めた学校をヤンキー校として取り上げ、動画をアップしている。

校長：岸和田や東大阪の高校などを取り上げていた。

委員：その学校をポジティブに取り上げているのか、ネガティブに取り上げているのか。

教頭：当該の youtuber が何か進めていくというよりは、実際の学校の様子を映している内容。

校長：その中で、（写っている生徒が）学校への不満を言葉にしていたり、ネガティブな内容も伝えていた。

委員：新卒の差別である。戦っていかなければならない。受けた方は自分で自分を責めて、やがてコンプレックスに繋がっていく。

校長：本校の場合、関わった生徒が3人だけだったことが救い。こういう内容の呼びかけに対して10人も20人も集まることがなかった。大多数集まると視聴者の受け方も変わってくる。

委員：それは学校満足度の高さに関連しているのでは。

校長：あまり関係していないように思う。生徒はその時どきでは不満はある。ただ振り返ってみると良かったという評価になっている。

委員：こういった差別はその都度戦っていく必要がある。その姿勢を生徒に見せることも大切。

委員：その動画に出ていた生徒にはどのような話をしたのか。

主任：「動画内で発言した内容については事実であるが、文脈で捉えると否定したことと変わりない。またこういった動画に出ることで得をしているのはこの youtuber だけで、うまく利用されていることをわからないといけない。」と伝えた。

校長：私からは、「みんな進路や学校生活を頑張っている中、西成高校の価値を下げるような動画に出演してどうする。これから学校に対して自分が積極的に関わって、文化祭や学校行事を盛り上げて返していきなさい。」と伝えた。

委員：インターネットや SNS が普及して、罪悪感なく動画を UP している現状がある。抗議や立ち向かう姿勢は常に持つ必要がある。

委員：西成区はどうしてもおもしろおかしく取り上げられやすい場所である。今までも地方の番組や新聞に不適切な表現があって謝罪と訂正をお願いした事例があった。やはり正面から向き合って対処していく姿勢を持ち続けるべきである。一方で、西成を盛り上げようと前向きな姿勢の youtuber もいる。

## （2）多様な生徒を支援する本校の取組

### 西成高校スタイルの確立

2005年から西成高校を見てきたが、今やっと思っているようなスタイルが確立されてきている。昔から進路保障と生徒指導は頑張っていた。人権学習に関しても、現在とは方向性は違うが頑張ってきた。2015年からエンパワメントスクールになり、ここから新しいスタイルの確立。35人学級という募集で、小学校三年生程度からの学びなおしをすると謳ってやり始めた。モジュール授業を毎日続けるという形で学びのスタイルを変えてきた。小学生の学び直しが不必要なというのは、従来の高校の考え方。適格者主義の考え方でいくと高校では高校の内容をすることになるが、「そうではない」という風が変わってきたのが西成高校のスタイル。しかし、2015年からを振り返ると、頭髪、制服に関

して厳しい生徒指導をやっていた。表面上は整っており良い学校に見えるが生徒の内面は違った。当時の学校満足度は6割を切っており、中退者も増えた。エンパワメントスクールとして「良い学校」に変わっていくはずが、この点に関しては変わらなかった。エンパワメントになってから1・2年目は、中学時に支援学級に在籍していた生徒を含め、多様な生徒の入学者が急増した。毎日学校へ来る元気な生徒が入学してくることを想定していたが、実際は支援が必要な生徒が来るようになった。学び直しに意欲を感じている生徒、外国にルーツがある生徒、日本国籍だが日本語の指導が必要な生徒など。これに対して我々は2017から第2回エンパワメント改革を始めた。まずは生徒生活支援室を作り、会議を隔週で行った。次に生徒指導改革を行った。規律指導を緩めて、平等ではなく公正な指導、生徒ひとりひとりに合った指導を行い、アセスメントの要素を強めていった。なぜそういう行動をとったのかといった背景の把握に努めた。生徒育成にも力を入れた。始業式・終業式の集合と司会は生徒がやっており、50周年の司会も生徒が取り合っている状態。LGBTQの生徒も増加している。LGBTQの生徒は中学校で不登校になる生徒が多い。そのため男性・女性の制服もやめた。

### 「確立」から「進化」

現在はエンパワメント改革の第3弾になる。始業時間を9:35にして、授業を45分に、定期テストを廃止した。年2回のコミュニケーションウィークを実施している。変更当初は、就職してから弊害が出るのでは？と言われていたが、今のところ問題が起きているとは思えない。時間によって柔軟に対応できる力を身につけさせたい。第3弾としては、地域連携本部を置き、コーディネーターとSC、SSW、CCを配置。外部連携の窓口。地域全体で子どもを育成していこうという動き。今まで積み上げてきたものが整理されてきた。

### 「現実」と「精神」

アルバイトをしている生徒が多い。アルバイトで稼いだお金を家庭に入れている。一日一食の生徒は各学年にいる。アルバイトは2日に1回のペースが多い。月に5万円くらい。学校満足度は高い。授業がわかりやすいからだと思う。生徒の「授業が楽しい」という声に先生もうれしくなる。ピンポン効果。先生が生徒を育て、生徒も先生を育てている。それが学校の高評価につながっているのではないかと。生徒指導で目をつぶっている先生もいると思う。しかし、ゆるいことがうまくいっている。今一番大事なことは、中退者を減らすこと。エンパワメントスクールの最大の目的はそれ。高校卒業を自信にして、世の中に出てほしいというのがねらい。そのために西成高校は他のエンパワメントスクールよりも色々な仕掛けを考えてやってきた。先生たちの努力や仕掛けが学校の高評価を生んで、中退者を減らすことに繋がっていると思う。それらの工夫をまとめたら、次のステップスクールになった。なぜ緩くしてきたかということ、自己責任にしないため。生徒指導に関わることには背景がある。家庭事情、本人の事情。それら全てに目を向けると、すべて許さないといけなくなる。しかし、どこかで誰かが叱らなければ、生徒の成長につながらない。叱ることは必要。ただし自己責任にしない生徒指導や学習指導が大切。家に机がない生徒に家庭学習を求めるのはどうか。そういった議論をしてきた。その結果が今。「学校に来てよかった」「授業が分かりやすい」という声はあるが、一方で不登校の生徒については進級率が悪いことが課題。これは西成高校が拾うべき問題なのか、不登校特例校や通信制の改革で救われるのか。西成高校としては、学校に来てくれさえすればなんとか進級できるように支援をしていく考え。しかし、来てもらえないためにこういう状況になっている。こういった課題が見えてきたことは教育庁に伝えている。少し偉そうですが、ここまでしている西成高校でも、これだけの生徒がいなくなってしまう。昼間の学校としては限界が来ているのではないかと感じている。ステップスクールはこのような生徒を何とかするための学校ではないと考えている。「得意なことを伸ばしたい」「集団生活は苦

手だが少人数学級ならやっていけると思うから西成高校で頑張りたい」という目的をもって入ってきてくださることが大切。

●質疑・応答

委員：不登校の問題についてだが、最近の朝日新聞によると昨年度の小中の不登校者は29万人程度いる。コロナ前に比べるとほぼ倍増している。コロナの影響で家にいる習慣化ができてしまったことも要因の一つだが、それだけではない。発達障害や虐待サバイバー等の問題を抱えた小中の不登校者に対する対応システムが作り切れておらず、今後も不登校は減少することは見込めない。小中時代に不登校の流れがと習慣化されていることが多いため、高校で不登校対策・対応は限界がある。ステップスクールでは不登校のことも視野には入れながらも、不登校の生徒の対応に特別注力していくという形をとらなくてもよいのでは。この問題は文科省が取り組んでいくべきだと思う。

委員：私には子どもが三人いるが、三人とも発達障害である。高校1年生の子どもは小学校6年生の頃から不登校になった。中学一年生はほとんど家で寝て過ごした。辛かったら行かなくてもいいという話もしたがどんどん甘えてしまった。本人もそれも自覚し、自己嫌悪に陥り、負のスパイラルになった。このままではよくないと考え方を変え、外に出ることを目標に働きかけをした。その後、何とか学校には行けるようになったが、クラスに入れず、支援教室で一日過ごす日々が続いた。少しずつクラスに顔を出す、機会が増え、2年生の途中からはクラスに入れるようになったが友達はあまりできなかった。3年生ではアプローチをたくさんしてくれる担任の先生のおかげで、文化祭からは学校行事にも楽しいと参加することができた。本人の頑張りもあるが、周りの関わり方が大きいと思う。

校長：学校を離れていく生徒の大半は友達がいなくなることが多い。何らかの形でつながりができれば、面白いことはたくさんある。学校としては面白い仕掛けを作りたいというのと、授業がおもしろくないといけないという両方ある。学校嫌いの人ではない人になってほしい。中学の時に学校に来ていなかった生徒が高校にきて一日も休まず来るということもよくある。ただその逆もある。その部分は予測のつかないところである。

委員：西成高校はある程度成果が出ている。この取り組みがほかの高校に伝播してほしい。中学校は学童保育がないため、「となりカフェ」のような居場所ができたり、授業が面白い、わかるようになったという生徒の声が聞こえたりするようになればよいと思う。一部の先生が頑張っている学校だけでなく、全体的に広がっていくのが目標だと思う。文科省から降りてくるのは現実的になかなか難しいので、現場からあげていく。西成高校でとなりカフェが始まって10年、次は他の学校にも広がってほしい。

委員：外国籍で母国語と日本語を話せる生徒はどのくらいいるのか？

校長：どのレベルで話せるかは明確にわからないが4,5人程度いるかもしれない。

委員：小学校でベトナム人、中国人などの生徒が増えている。授業についていけない、教室で孤立してしまうケースがよくある。そういう生徒の言語的サポートに西成高校の生徒が関わってもらえるとありがたい。良い経験になるはず。地域活動協議会のホームページ、資料の作成をする活動に有償で協力してほしい。また、西成区の地域の防災力が高齢化もあり落ちてきている。地域の防災にも西成高校の生徒が関わってくれれば嬉しい。

校長：西成高校も年度によっては、外国籍の生徒が1割以上超えていることもあった。親の母国と日本を行き来しているうちに、どちらの言語も習得が不十分になってしまい、知的障がいの判定が出たという例がある。サポートに行ける生徒がいればよいなと思う。

委員：靴作り部の話をよく聞く。取組みの認知度が上がってきている。進路保証課では卒業生講話、インターンシップ、仕事理解ガイダンスの取組みは近隣の企業でも認知している企業が増えている。企業と生徒と教員の距離が近づけば近づくほどつながりができる。西成高校の生徒を地域の中で見てもらい、周囲の社会人と接点を持っていけば、生徒が社会人になった時にコミュニティの力を味方にして社会に出ていけるのではないか。

委員：お金の話だが、そもそも友達を作れないというのが問題。不登校の子も友達ができれば学校に来るようになるという話があったが、昔でいう集団作り、仲間づくりの現代版のようなものが求められているのかもしれない。どういう形で集団を作っていくのかという課題はあるが、自分が認められてこなかった経験をしてきて、集団の中で認められたり、いろんなところで関係を作って必要とされる経験をするチャンス、学校がいろんな角度から考えてほしい。外との連携の中でいろんな人間関係を築くなども考えていくのが良い。また、昔と変わって家族滞在が増えている。親が安定した在留資格ではなく、労働の資格を持っており、日本に呼び寄せられる子どもたちが多くいる。子どもも稼ぎ手となり働いている。母語も日本語もうまく話せないが通訳をやっていて、兄弟の面倒を見ているというパターンが多い。在留資格の安定していない人たちが増えている。稼ぎ手が増えないため、家族を呼び寄せてよい措置が始まる。特別在留資格がないために生活保護も受けられない子どもたちが増えていくだろう。

校長：カフェは基本的には集団作りではない。個別に集まってきて知り合いにはなる。学校でない場所が学校にあるので、全くつながりのない子がそのつながりがあることで学校に来ることがある。クラスでの集団作り、部活での集団作りでは先生たちがどういう目標をもって集団を作っていくか。系統的な取組みを改めて、ホームルームをどのように取り組んでいくべきかを考えなくてはならない。

委員：発達障がいはこちら10年で倍増している。グレーゾーンの子を含めてグループ作りが極端に難しい。最初はぎこちないが何とか友達を作っていくというのは、難しい。

校長：仲間紹介の取組みは今までなかった取組みだが、集団作りができるわけではない。

委員：体育祭など集団で取り組む行事は子どもを育てることにつながっているので、子どもたちにそういった機会を提供し続けることは必要。

### (3) その他

校長：どのような生徒であれ西成高校では最善を尽くしていきたい。今年度のまとめと来年度の展望とともにスクールポリシーについて次回の会議で提示する。